

学生奮闘記

海は繋がってる

大山 滉将（鹿児島大学大学院農林水産学研究科）

12月、蒸し暑さと独特の香りで充満した空港に降り立った。今回は JSPS 研究拠点形成事業の一環として、マレーシア・サバ大学での野外実習に参加した。現地の海洋生物を観察するため、南シナ海が目の前に広がるキャンパスから出船し、スノーケリングのポイントを探しつつ船を走らせた。心地よい潮風と、ところどころに見える小島に広がる緑、空の青色に感動を覚えた。一方で少し視線を下に向けると嫌な気分になった。ビニール、ペットボトル、缶などの漂流物が目についた。環境問題の1つとして取り上げられる海洋ゴミ。ペットボトルのラベルには様々な言語が記されていた。これらのゴミはどれほどの距離をどれほどの時間をかけてここまで流れてきたのか、日本から流れてきたゴミもあるのかとしばらく考えているうちにポイントに到着した。気を取り直して海に入ると、これまで見たこともないような大きさのテーブルサンゴを目の当たりにし、心が躍った。私が近づくと、寸分違わず同じタイミングで進行方向を変える魚群、サンゴや岩に隠れる色とりどりの魚たち。鹿児島湾とは違う海中の様子に感動しつつ、周囲を見渡し、ある魚を探し続ける。

残念ながら目当ての魚を発見できないまま帰港の時間がきてしまったが、希望は捨てなかった。滞在先のすぐ近くに市場があることを知っていたからだ。磯の香りと賑やかな声が飛び交う市場を進んでいくと、見つけた。見慣れた形と模様「オオモンハタ」。資源管理を目的として、私が生態を研究している対象種である。ハタ科魚類はその価値の高さから低緯度地域を中心に、世界中で広く利用されている水産資源だ。一方で、強い漁獲圧に曝されており、絶滅が危惧されている種も少なくない。資源管理の方法は様々あるが、成熟サイズに満たない小型個体の漁獲規制もその1つである。これまで進めてきた研究から、オオモンハタの成熟サイズを知っている私からすると、市場に並んでいるオオモンハタはどう見ても小さかった。漁師の立場からすると魚のサイズを気にする余裕はないのかもしれないが、乱獲を目の当たりにしてショックを受けた。改めて自身の研究の重要性に気付かされ、私達人間が本当に持続可能な資源利用を目指すなら、より多くの生態研究とより早急な対応が必要であると感じた。

雪が降るほど寒かった鹿児島、一方で汗が止まらないほど暑かったマレーシア。同じ時期にもかかわらず全く異なる景色が広がる2つの地域。たとえ同じ時期でも地域、島、国が異なれば見える景色も異なり、まるで違う世界かのように感じるかもしれない。それでもゴミはどこから流れてきて遠く離れた海を漂っている。オオモンハタを含め多くの魚類は世界中の様々な海域で生息している。海は繋がっていると改めて思った。どこかの誰かが何も考えずに行っている海上投棄が別の誰かをどこかで困らせ、海洋生物の命を脅かしているのかもしれない。どこかの誰かが目先の利益のために行う乱獲の影響がどこかの誰かを困らせ、海洋生物を絶滅に追い込んでいるのかもしれない。今日よく話題にあがる SDGs。ただ掲げるだけの目標にならなければよいが。



写真1 砂浜に打ち上げられたゴミ



写真2 市場に並べられたハタ科魚類（ほとんどがオオモンハタ）